巻頭の言葉

人に心をかける

イエローハット相談役
鍵山 秀三郎

目に光のない人

「生きてて死んでいるような人が多い中にあって、あなたは死んでもなお生き続けているのですね」

大阪の詩人、里みちこさんが故・奥井理少年に贈った言葉です。

天才と言われながら、惜しくも交通事故で急逝した奥井少年ですが、遺された絵は『19歳の叫び』という画集となって出版されました。素晴らしい画集です。

いまの日本には、目に光がなく、言葉にも光と力のない人が増えました。乗り物に乗り合わせたり、街で行き交う人たちの、生気のない顔や姿・態度・振る舞いなどを見るにつけ、「生きてて死んでいるような人が多い」という里さんの表現がそのまま当てはまる人が、いかに多いことかと思わされる昨今です。

このような人の中には、社会の不条理に押し潰されて疲れ果てた人、会社の過大な欲求の犠牲になって日々あえいでいる人、また時には自ら人生の道を誤ってしまった、自己責任に帰する人なども含まれていましょう。この人たちから生じる〝気〟は、陰性で消極的な暗いイメージが共通しています。

思いやりのある上品な生き方をする

では、陽性で積極的な考え方で行動をしている人がすべて「生き生きとして、人間らしく生きているか」と言えば、「そうだ」とは言えないのがいまの日本です。自分一人は生き生きと活動しても、自分の欲望を満たすために利己心をむき出しにして、他を顧みない生き方をする。自分の利益のためには他者のことは眼中に置かない。人の骨折り、苦労・誠意を酌み取ろうとしないばかりか、あくなき収奪をし続ける、といった姿も「生きてて死んでいるような人」の部類であると思います。

なぜならば、人間らしい心を持たずに生きているからです。自分さえよければそれでいいという考え方は消極的であるよりも、積極的であるがゆえに、苦しみ疲れ果てる人を次々と生み出していって、社会に負の遺産を積み上げていると思います。

繁栄し続けるコーヒー産業の実態を描いた英国の自主製作映画『ブラック・ゴールド』で、コーヒー生産農家の苦境が報じられています（日本では上映されていません）。私たちが味と香りを満喫する一杯のコーヒー代の千分の一しか生産農家の手には渡らないとのことでした（東京新聞二月十一日朝刊）。

自分一人が楽しみを享受し利己心を露にする行為によって、人に過酷な労働を強い、計り知れないほど遠くの人までたくさん苦しめていることを慮りたいものです。〝自分だけが一円でも安く買いたい〟という欲望が、疲れ果てた人を生み出す原因になっていることに気づくことが大切です。

河井寛次郎先生の箴言の中に、「もの買ってくる、自分買ってくる」とあります。目に見えない人の心を酌み、他の人々に心をかけることこそ外側を豪奢に飾るよりも品の良い生き方であると思います。

人間の区別は「上品か下品かしかない」。中品という位置に相当する人はいないので、上品でない人はすべて下品であるとある方から教えられました。いまの日本は、上品ではない人が増え続けています。

安倍首相が目指す「美しい国日本」を実現するには、思いやりのある上品な生き方をする国民になることが先決です。その生き方こそ、里さんの言葉によれば、「死んでもなお生き続けている」生き方でありましょう。

「巻頭の言葉」は京セラ名誉会長・稲盛和夫氏、ウシオ電機会長・牛尾治朗氏、イエローハット相談役・鍵山秀三郎氏、アサヒビール名誉顧問・中條高徳氏にリレーでご執筆いただきます。